

理工学部改革と女性研究者支援事業



早下隆士

上智大学
[102-8554] 東京都千代田区紀尾井町7-1
理工学部長, 工学博士.
専門は分析化学, 超分子化学, 分子認識化学.
ta-hayas@sophia.ac.jp
www.mls.sophia.ac.jp/~analysis/

女性研究者支援事業のご縁で、理化学研究所の前田瑞夫先生から本誌での執筆の機会をいただいた。心からお礼申し上げたい。本稿では、上智大学理工学部が進める改革と女性研究者支援事業について、紹介させていただきたい。

創立100周年の歴史をもつ上智大学の中で、理工学部は2012年に50周年を迎えた。上智大学を総合大学にするために、ドイツのケルン教区やドイツ財界、世界中のカトリック信者の募金によって創設された学部である。当時から国際社会で活躍できる科学技術者、研究者を育てることが大きな目標とされていた。2005年には、現代的教育ニーズ取組支援プログラムとして「グローバル社会における系統的英語教育」が採択され、理工学部は科学技術英語教育を取り入れている。学部4年間を通じて一定の科学技術英語科目の単位を修得し、最後に卒業研究を英語でまとめた学生に、理工学部が修了認定証を授与している。また2009年度からは、海外からの留学生を積極的に受け入れることを目的としたグローバル30プロジェクトの拠点校に、本学も採択された。特に理工学部では、2012年度から秋入学で、英語のみで学士卒業できるグリーンサイエンスコースとグリーンエンジニアリングコースを開設した。最初の入学者数は、5名と寂しいものであったが、英語コース担当教員の努力もあり、本年度の入学者は8名に増加した。あわせて2013年度には理工学研究科にグリーンサイエンス・エンジニアリングの英語コースを開設し4名が入学している。これは当初の計画にはない取り組みであったが、アジア各国に英語コースの説明を行った中で、大学院への進学希望が予想以上に多かったことが発端である。開設には大変な苦勞もともなったが、英語コースをもつ理工系学部で短期で留学体験をさせるプログラムが、各国で国策として開始されており、ドイツからの交換留学生やブラジル政府からの派遣学生の受け入れなど、英語コースを開設したメリットは予想外に大きいことを実感している。あ

わせて理工学部学生に特化した米国への短期語学研修プログラムを、科学技術英語教育カリキュラムの一環として2011年度から開始した。理工学部が夏休み、春休みに実施するプログラムとして、学生に好評である。海外からの留学生と日本人学生がともに学ぶ交流の場が確実に増えている。このようにグローバル人材育成のための新しい取り組みは、次の50年を見据えた理工学部の改革に不可欠なものとなっている。

改革を進める中で、本学は2009年に「グローバル社会に対応する女性研究者支援」プロジェクトが採択された。初年度に理工学部を中心とするワーキンググループを整え、優秀なコーディネータを迎えたことで、2年目から本格的な活動を開始することができた。コモンスペースの設置、育児支援、グローバルメンター制度の実施、女性研究者の国際交流推進、ネットワーク構築などである。とりわけ女性研究者比率の少ない理工学部女性教員の数を2020年までに15%に引き上げるために、毎年度の女性教員の新規採用比率を25%以上にする必要があった。数値目標を上げるのは簡単であるが、その実行には困難をともなった。少子化が進む中で大学の生き残り戦略として女性教員の必要性を訴え、理工学部教授会の理解と協力なしには、本プロジェクトの成功はなかっただろう。最終年度には、新しい女性副学長の協力も非常に有り難かった。ポジティブアクションの成果も加わり、4%に満たなかった女性教員の割合を、本年までに11%まで増加させることができた。明らかに理工学部の雰囲気も変化した。本プロジェクトは2011年度で終了したが、嬉しいことに本学の成果に対し、私立大学初のS評価をいただくことができた。

理工学部の改革を進めるに当たり、筆者が強く感じたことは、人との繋がり大切さである。プロジェクト推進の理解を得るために、夜遅くまで説得に当たったこともあった。全員の歯車がかみ合った時に、予想を超える成果が生まれる。これまでの改革に協力いただいた、すべての関係者に心より感謝申し上げたい。